週刊ダイヤモンド　名著再読

北村行伸

平成 16 年 12 月 13 日号
980字

「古い医術について　他八篇」

ヒポクラテス㈜　小山政恭㈜
岩波文庫　1963年7月16日刊

今年のアメリカ大統領選挙の論点に妊娠中絶禁止というものがあった。中絶に比較的寛容であり、一部の関係者を除いて深刻に論じてこなかった日本の風潮からすると、中絶禁止が大統領選挙で論じられるべき大問題であるというのは理解に苦しむ方が多かったのではないだろうか。

実際、アメリカで妊娠中絶に反対しているのは今回の選挙で有権者の16%であり、決定的な要因であったとは考えられないが、中絶と並んで同性愛も容認しない保守革命がアメリカ中西部を中心に進行しており、多くの論者がこれを「キリスト教原理主義」への流れとして論じていたように思う。

ここで紹介したいのは、妊娠中絶や安楽死に対する反対論の原点はキリスト教誕生以前のギリシャのヒポクラテスにまで遡るということである。ヒポクラテスの著作は医学に関する最も古い記述であり、とりわけ、「医師の心得」と「誓い」は医者の倫理学に関する議論をしており、現在でも、医学関係者は折りにつけ耳にするものである。

有名なヒポクラテスの「誓い」の内容を紹介すると、(1）医術は無償で伝承されるべき技術であり、医学教育に金銭的な対価を求めるべきではない、(2)安楽死に手を貸さない、(3)妊娠中絶は行わない、(4)患者の利益を主とし、私腹を肥やすべきではない、(5)患者に関して守秘義務があること、などが簡潔に述べられている。要するに、自己犠牲と人間の生命を尊重すること、すなわち、医師の都合よりも神に授けられた生命を重視すべきであるということである。

この「誓い」の意味することは明白であるが、これらの項目が実際には守られてこなかったことに気がつくだろう。むしろ当時から、安楽死を擁護する医師は多く、特権階級と深い関係を結び、私腹を肥やす医師は後をたたなかった。望まれない妊娠を中絶させることも間々あったであろう。これを医師の堕落と捉えるのか、現実的に助けを求めている人の要望に答えているのだと捉えるのかは判断が分かれるところである。

こういった対立は、生命第一主義対患者中心主義、すなわち、母体か胎児か、死の苦しみか殺人か、といった極めて倫理的な議論につながり、それが現在まで続くリベラル対保守の対立に引き継がれてきているのである。

現代的な医療倫理についてはグレゴリー・E・ペンスの『医療倫理　1・2』（みすず書房）を読まれることをお勧めする。